

『とりかへばや物語』の宰相中将再考

——鳥澁者説批判と子育てする父親像について——

長 内 綾 乃

一、問題の所在

『とりかへばや物語』の宰相中将は女君の男装の秘密を見破り、彼女との間に若君を儲けただけではなく、男装時の女君の妻である四の君と密通し、二人の姫君を儲ける。また、尚侍であった男君の控える宣耀殿に二日間も居座り続ける。さらに、物語末尾は宰相中将の心情を表すものとなっていることも注目に値する。宰相中将の登場場面を見ても、彼が物語において重要人物であるのは間違いない。

宰相中将はこれまでどのような人物として理解されてきたか。^①宰相中将は時の帝の叔父である式部卿の宮の一人息子であり、女君より二つ上で容貌は男装の女君には及ばないが、普通の人より遙かに優れており、且つ、どんな女性にも興味をもつ生来の好みとして登場する。この色好みという人物像を主として、宰相中将は以下の

ように鳥澁者であるとも言われる。西本寮子氏が、

そのをこなる一面を強調することで、女主人公の心強い女性への変貌を促し、物語に彩をそえる役割を持つ脇役なのである。^②

と、『とりかへばや物語』を論じる上で宰相中将の「をこ」なる一面は、女君の「女の物語」を際立たせる役割を担うと述べたことを初めてして、神田龍身氏も、

兄妹交換という最大の秘密に接近しすぎた二人（宰相中将と女春宮^③注・引用者）は、遠からず物語世界から排除されることになるのであり、何も知り得なかった宰相中将は鳥澁者として揶揄されるし、女春宮は一挙に女院へと祭り上げられて物語の外へと実質上退場するのである。^③

と、取り替えの秘密を知り得なかった宰相中将は鳥澁者と揶揄されると述べる。また、安田真一氏は、

〈普通の〉姫君とは異なる女君と関係を持った宰相中将の物語

は、〈色好み〉・宰相中将の嘆きの物語だ。それは、別の視点から見れば、〈色好み〉・宰相中将の「をこ」「痴れ者」の物語でもある。色好み・好き者の貴公子として、当代きって評判の〈男〉であった宰相中将は、女君を失ってからのその世評は、「をこ」となったと言えるのではないか。⁽⁵⁾

と主張し、さらに、岡本美奈氏も、

宰相中将が好色で滑稽な役回りとして位置付けられることに異論はない。物語の後半には宰相中将を「をこがましや」などと述べる記述がいくつもあり、烏滸者（をこ）として扱う姿勢がはっきりしている。⁽⁶⁾

との見解を述べている。

以上のように、通説は一貫して宰相中将Ⅱ「烏滸者」という理解がなされている。これらの論考を踏まえて、中島正二氏は、宰相中将が「烏滸者」であるとする通説的理解は不当であると、「烏滸」性の再検討を行った。その上で、宰相中将の主人公性を再び捉え直し、『とりかへばや物語』において宰相中将は、

「色好み」の願望を成就してしまうものの、それと同時にその破局を生き、世俗的出世の代償として「色好み」性の放棄と報われない秘密保持を持続させられる、きょうだいの、逆説的な「代行者」乃至は「補完者」である。⁽⁶⁾

と結論づけた。

宰相中将が「烏滸者」であるとされるのは不当であるとする論が提出されても、佐野佳矢乃氏が、

宰相中将という人物は、本物語において好色者であり烏滸者でもある。⁽⁷⁾

と断言しているように、中島氏の見解は無視されていることがわかる。

宰相中将は通説では一貫して「色好み」で「烏滸者」として理解されている。物語においても、宰相中将が「色好み」であるという記述は散見しているため、宰相中将が「色好み」であることには異論がない。しかし、「烏滸者」であるという評価がなされていることに関してはいくつか疑問を持つ。

なぜ宰相中将が「烏滸者」として理解されているのか。物語の中で宰相中将が烏滸者であると直接述べられる場面は一つも無い。そこで、中島氏は宰相中将を烏滸者とする学説の論拠を以下の様に整理した。

(i) 秘密の未掌握、(ii) 女君に対する無理解、(iii) 世評、(iv) 「をこがまし」などの記述⁽⁸⁾

(i) (iii) の中島氏の論評には概ね首肯するが、氏は(iv)「をこがまし」などの記述についてはあまり言及しておらず、巻四で男君が語り手に「をこなるや」と評されていることをあげて、「をこがまし」「をこなり」は必ずしも「烏滸者」の指標となっているわ

けではない」と述べるに留まっている。中島氏の見解では、「宰相中将には「をこなり」が用いられており、また、男君にも「をこなり」が用いられている。しかし、男君が烏滸者であるという見解はない。よって宰相中将も烏滸者であると言えない」、という論が組み立てられていることになるのだが、それでは説明が不十分であり、納得のいくものではない。ここでは、宰相中将を直接「をこ」であると評していると思われる「をこがまし」「をこなり」という記述を詳細に検討していくことで、宰相中将が烏滸者とされてきた通説を批判する。また、烏滸者でなければ宰相中将は『とりかへばや物語』においてどのような役割を担うのかを再考していく。

二、「思へばをこがまし」は草子地か

二一、疑問点の整理

まず、宰相中将に使用される「をこなり」「をこがまし」の用例を確認してみる。

I いみじく思ひ入りても限りあるわざなるを、「いかなれば、いとほしくも」と聞こえたまへるを、ほのかに馴らひにける人なればあなたがちなるもの恨みの気色なくさはやかにもあるかなと見たまふも、をこなりや。(巻三・三六七頁)

II かばかりのことを夢に見んだに覚めての名残ゆゆしかるべし、容貌けはひの言ふ方なく愛敬つきにはひ満ちて、憂きもつらき

もあはれなるも、いとにくからず心うつくしげにうち言ひなしたまひし恋しさの、さらにたとへて言はん方なく、胸よりあまる心地して、人のをこがましと見思はんこともたどられず、足摺りといふらんこともしつべく、泣きてもあまる心地して沈み臥したまひぬる御気色の、いみじくいとほしくわりなきを、見たてまつり嘆かる。(巻三・三九三頁)

III 内侍の督の君のかかる御宿世いつくしさを聞きたまふも、ただ、あさましく見違ふばかりに似たまへりしものを、つれなくすかし出だされきこえにしも、かかるとりかへのあればとうち慰みにしこそ苦しからずおぼえしか、いかにをこなり痴れ者と思し出づらん、と思ふばかりにぞ、かく及びなく定まり果てたまひぬるも口惜しうおぼえたまひける。(巻四・四六八頁)

IV 月日に添へては、若君のものをひき伸ぶるやうにうつくしうなりまさりたまふを見たまふにつけては、かかる人さへなからましかば何に心を慰めましと思すにも、また、もろともにうち語らひてかかる人を同じ心に生ほしたてましに何ごとをか思はましと思ふには、飽かずかなしくて、つくづく、歩きもせられたまはず若君を夜昼御かたはら放たず遊ばしきこえて明かし暮らしたまふも、思へばをこがましや。人はさしも思し捨てけるを、わが心にしも身をくだきつつ思ひても何にかはせん、いとあはれに同じ心にあはれをも知り情けをも交はし思ひし人を

も、さこそ世に憚るといひながらよその人に見捨てて月ごろになりにつけるかな、と思されて、つれづれにつくづくと慰む方なきまに、左衛門がりこまごまと文書きたまふ。

(巻四・四六八―四六九頁)

V行方なき御形見と見たまふる人も、さすがに男の身なれば片時たち離れでもあるべきやうなし。おのづから暇なくて見ぬ日もいとうしろめたくはべるを、今はこの御あたりにさぶらはせてこそは心やすく思ひたまはめ。さりととも誰もよも思しめし捨てさせたまはじと思ひたまふる人の上なれば、かく聞こゆるもを「こがましけれど」とて、忍びあへずほろとこぼれぬも、…

(巻四・四九五―四九六頁)

Iは宇治と都を往復する宰相中将が、女君の恨みや嫉妬に気づかないことへの語り手の評価である。IIは宇治から失踪した女君が御座所に残した衣の移り香に、悲しみがこらえられなくなって泣き崩れる場面である。IIIは督の君(宇治から失踪し男君と入れ替わった女君)が帝の子を懐妊したことを知り、かつて宣耀殿に忍び入ったときのことを思い出し、督の君は騙された自分を愚か者だと思っているだろうと悔しく思っている。IVはひとまずおく。Vは吉野の中の君と関係を結んだあとの宰相中将の台詞である。目の前にいる大將に語りかけながらも、大將を男装に戻った女君と思い込み、吉野の中の君との関係を弁解し、宇治の若君のことを話題に出す。「を

こがまし」というのは捨てられた身で弁解する自分が大將から見たら愚かに見えるということで、ここは自嘲だと考えられる。

宰相中将に使用されている「をこなり」「をこがまし」の使用例を検討すると、女君失踪以後の宰相中将に「をこなり」が使用されている。Iは確かに、母となった女君なら再び男姿に戻ることはないという思い込みからくる宰相中将の楽天的態度に向けられた語り手の批評である。しかし、父として宇治の若君を養育するようになってからのII・Vの「をこがまし」とIIIの「をこなり」の用例は、宰相中将の発言または心内語であり、他者から見て自分が愚かに見えるのだという自嘲のためIとは意味が異なる。

ここでIVについて掘り下げて考えてみる。文構造からは、直前の「つくづく」と、歩きもせられたまはず若君を夜昼御かたはら放たず遊ばしきこえて明かし暮らしたまふ」が「をこがまし」と評されるのだらうか。しかし、外出をせず子を養育する姿がなぜ「をこがまし」となるのか。『新釈』では、「女が失踪し、後にとり残された子を男親が育てているというのは、婿取婚時代では異端。」(五五〇頁)であることが「をこがまし」であると注が付されているが、そのようにとってこの場面は正しく解釈されるのか。疑問点として以下の三点をあげる。

- ・「思へばをこがましや」は草子地なのか。
- ・「をこがまし」は何を指すのか。

・宰相中将の姿は「をこがまし」なのか。

改めて当該箇所「をこがまし」を確認したい。各注釈書は以下のような見解をとっている。校訂本文と現代語訳、あるいは解釈のわかる注をあげる。

①『古典文庫』（下冊・下三九九頁）

本文：わか君をよるひる御かたはらはなたず、あそばしきこえて
あかしくらし給も、おもへばおこがましや。

心内文は「」に入れるという校訂態度をとっているため、当該箇所は地の文。

②『校注』（二二頁）

本文：若君を夜昼御かたはらはなたず、あそばしきこえて明かし
暮らしたまふも、思へばをこがましや。

頭注：みつももないことだよ。

心内文は「」に入れるという校訂態度をとっているため、当該箇所は地の文。

③『学術文庫』（巻四・一三七～一三八頁）

本文：若君を夜昼御傍放たず、遊ばし聞こえて明かし暮らし給ふ
も、「思へばををこがましや。」

訳：若君を夜昼おそばから離さず、遊ばせ申しあげて日を過ごして
おられると、「考えればばからしい。」

本文も訳にも心内文には「」をつけており、当該箇所を宰相中将

の心内文として理解。

④『新釈』（五四七～五五〇頁）

本文：若君を夜昼御かたはら放たず、遊ばし聞こえて明かし暮ら
し給ふも、思へばをこがましや。

通釈：若君を夜も昼もおそばに置いて遊ばせ申しながら日を送っ
ておられるが、考えればおかしなことである。

通釈の心内文には「」をつけるという態度をとっている。当該箇所は「」がなかったため、地の文とし、通釈を見ると草子地であることがわかる。

⑤『新大系』（三一九頁）

本文：若君を夜昼御かたはらはなたず遊ばしきこえて明かし暮ら
し給も、思へばおこがましや。

注：考えてみれば馬鹿なはなしだ。草子地。

心内文に「」をつけて表してはいないが、注に「草子地」とある。
⑥『全集』（二八四頁）

本文：若君を夜昼御かたはらはなたず遊ばし聞こえて明かし暮ら
し給ふも、思へばをこがましや。

訳：若君を夜も昼もお傍から離さず遊ばせなさってお暮らしにな
るのも、考えてみると愚かなことであるよ。

本文も訳にも心内文には「」をつけて表しており、続く「人は」
から心内文として扱っている。訳を見ると草子地であることがわ

かる。

⑦『新全集』(四六八～四六九頁)

本文：若君を夜屋御かたはら放たず遊ばしきこえて明かし暮らしたまふも、思へばをこがましや。

訳：若君を夜屋おそば近くでお遊ばせになって毎日を過ごしていらっしゃるというの、考えてみれば愚かしいことである。

頭注：語り手の評言。

訳の心内文には「」をつけている。当該箇所は注により草子地であることがわかる。

以上のように見ていくと、当該箇所を草子地と解釈しているものがほとんどであり、宰相中将の心内語として解釈しているのは『学術文庫』のみである。

また、当該場面に関して、伊達舞氏は以下のように述べている。

女君の身代わりである宇治の若君の存在が、却って女君を思い起こさせる種ともなっているという閉塞した状況にあって、それを打開出来ない宰相中将に向けられたものであり、自嘲にも近い、宰相中将の視点に寄り添った語りと言える。

伊達氏は、「思へばをこがましや」を「語りのことば」と理解したうえで、ここでの語りは、宇治の若君を見るにつけて、女君を思い出す現状を打開出来ない宰相中将に寄り添ったものと解している。確かに「」につけては」という表現は、語の前半の文章が後半の文

章における思考や感情の契機を表す役割を持つ⁽¹⁰⁾。また、宰相中将に関して言えば、「」につけては「」につけても「」にも」という表現が多用されており、宇治の若君を通じて女君を思い出す場面が多々描かれている。

二二二、「をこがまし」「をこなり」の再検討

では、「思へばをこがましや」は先行研究に指摘されているように草子地なのか。『とりかへばや物語』における「をこがまし」「をこなり」の使用状況から検証してみる。『とりかへばや物語』では「をこがまし」の用例が当該場面以外に十三例あり、うち八例が心内文、三例が会話文である。残りの二例は地の文である。心内文と会話文に使用されていると断定できるものは、草子地にはなり得ないので、ここでは地の文に使用されている二例を引用する。

i 心のうちは隔たる心地して、むげにさのみうらなからむもをこがましかるべければ、いとありしやうにも睦びたまはぬを、：

(巻一・二二五頁)

ii 女君とは二三日とも隔たるべきほどはおぼつかかなかるべきことをあはれになつかしくうち語らひ、さる方にあさからぬ御仲と見えしを、このことの後は、かの御心のうちの人目もをこがましければ、さしもあらずなりにたるを、：

(巻一・二三五頁)

i は四の君が宰相中将と密通し、懐妊したことによって女君と四

の君が疎遠になるくんだり。四の君との間に心の隔てができたと感じた女君が、そういった感情を見せるのは愚かしいと感じる場面である。iiは同じく四の君と宰相中将が密通した事件を機に、女君が四の君にどう見られているか考えるところと愚かしいと感じるくんだり。i・iiとも女君が他者から見て「をこがまし」と思われてしまうと考えている様子を語るものである。

一方、「をこなり」は、先に引用したI・IIIの他に次の一例のみである。

ことごとしからぬ御遊びなれどなかなかまめかしうおもしろきに、中納言は琴の音のみ心にかかりて、「かやうなる夜は女の交じりたるこそをかしけれ」とのみ聞こえたまふを、大將は、女君の琴を混ぜたらましかばまいていかにめで惑はんと思すぞ、をこなるや。

(巻四・四九一頁)

先に揚げたIは女君の気持ちを察しない宰相中将に対する語り手の批判である。IIIは宰相中将の心内文である。尚侍が自分のことを「をこなり」と思っているだろうと宰相中将は考えている。そしてこれは、二条邸での遊宴に宰相中将を招いた際に、宴に女性を加えたらよいと言った宰相中将の下心に気づかない男君への語り手の批判である。

「をこがまし」と「をこなり」の使用例を比べると、両者にははっきりとした使い分けがある。「をこなり」は地の文で用いられる場合、

対象となる人物を語り手の立場から批判する草子地として用いられる。一方、「をこがまし」は基本的に会話文ないし心内文で用いられる。地の文で用いられる場合は、登場人物の心の内を客観的に語るものとなる。つまり、「をこなり」とは異なり、「をこがまし」は登場人物を語り手の立場から批判するものではないのである。以上のことから「をこがまし」は草子地には用いられず、当該箇所「思へばをこがましや」は草子地ではないことが言えよう。

二・三、本文の再検討

今一度、当該本文の構造を見ていきたい。宰相中将は、日に日に成長していく若君を見る度に、若君がいなかったら心を慰めるものがなかったと思う。また、若君を女君と育てていたら何の悩みもなかっただろうとも思う。反実仮想「もろともにく思はまし」は「飽かずかなしくて」に掛り、女君がいらない現状に満たされず悲しむ宰相中将の姿を描いている。宰相中将は満ち足りないまま、「つくづく」と、歩きもせられたまはず若君を夜屋御かたはら放たず遊ばしきこえて明かし暮らしたまふ」のである。

「思へばをこがましや」は、続く宰相中将の心内文に含まれると考えるべきである。つまり、直前の「くも」を境界にして地の文から心内文へと自然に移行していく「移り詞」⁽¹⁾なのである。

ここでの「も」は接続助詞として用いられているということであ

る。このような、「も」を接続助詞として用い、地の文から心内文へと移行する例は、『とりかへばや物語』では他に次の例がある。

女君はいと恥づかしくなしきものから、かかるにつけても、あながちなる人の契りあさからぬあはれはこよなく身にしてみたるも、我ながらいと心憂し。中納言も、…（巻一・二三五頁）
また、『狭衣物語』にも同様の例が見られる。

いかがはせむに思ひ弱りて、見たてまつりし人さへひとりうちまかせて、我は失せたまひぬるも、「思へば、さまざまにはかなうあはれなる世なりや」など、とり集め涙こぼれぬべきを、忌々しうおぼし返すべかめれど、何事の折も、まづ心のうちものあはれなることぞ、絶ゆべくもあらぬ御様どもなる。

（巻四・三四六頁）⁽¹²⁾

『とりかへばや物語』の例では、「も」より前節は、宰相中将との関係に縁を感じる四の君を語る地の文である。「も」を境に四の君の心内文「我ながらいと心憂し」に移行し、「中納言も」と語りの主体が変化していく。「我ながら」とあることから、四の君の心内文と考えるべきであるが諸注釈書では言及されていない。

『狭衣物語』の例では、「も」より前節は地の文であり、飛鳥井の女君が娘を残して亡くなったことを語るものである。そして「も」を境界として「思へば、さまざまにはかなうあはれなる世なりや」と狭衣帝の心内文へと移行していく「移り詞」である。

当該箇所が「も」を境界とした「移り詞」と考えると、宰相中将の心内表現は「と思されて」以前の、「思へば」月ごろになりけるかな」となる。ここでは「思へばをこがましや」は下に掛かっていくのである。直後に「人はさしも思し捨てけるを、わが心にしも身をくだきつ思ひても何にかはせん」とある。女君は自分を捨てたのに、自分だけが身を碎く思いをしていることが「思へばをこがましや」なのである。宰相中将はそう考え、四の君を思い出して左衛門に手紙を書くという展開になる。

当該箇所は、『学術文庫』に示されたように、「思へば」からを心内文と捉える解釈が妥当である。

二一四、小括

「をこがまし」は他者の視線を意識した語である。このため、心内文「思へばをこがましや」は宰相中将の姿を「をこがまし」と断定するものではない。そして、女君失踪後に宰相中将に用いられる「をこなり」「をこがまし」は、宰相中将が自嘲的に用いているものであり、それによって宰相中将は「烏滸者」であるということにはならないのである。宰相中将の「をこなり」「をこがまし」という記述を検討すると、『とりかへばや物語』での語の使われ方の違いが明確になり、これらの記述からは宰相中将が烏滸者であるという通説の理解は不当であると結論づけられる。中島氏が規定した、宰

相中将が烏滸者であるとされる四つの理由のうち、(iv)からは烏滸者とは言えないのである。

三、烏滸者の内実

中島氏が規定した宰相中将を烏滸者とする理由 (i)・(ii)・(iii) に関して、本稿でも今一度整理しておく。

(i)「秘密の未掌握」について。宰相中将は尚侍が実は男であり、左大臣家がきょうだいを取り替えていたということには気づかないまま物語は閉じられる。しかし、取り替えの秘密を知るのは、左大臣家の外部の人間にとっては事情を知らされない限り不可能であり、帝や四の君でさえ知らない。まして、宰相中将は男妾に戻った男君に接触を避けられていたので解るはずがない。帝や四の君を烏滸者であるという批判ができないように、宰相中将だけが秘密を知らないことで烏滸者とされるのは妥当ではない。

(ii)「女君に対する無理解」について。中島氏は、女君は「異常な女性」であり、そのような女性を理解できないことは、烏滸とは言えないと述べる。『無名草子』にも、

また、宮宰相こそ、いと心おくれたれ。さしも深くものをおぼえずは、なでふ、至らぬ限なき色好めかしさをか好まるる。女中納言とりこめて、今はいかなりとも、と心安く思ひあなづるほど、まづいとわろし。さばかりになりたる身を、さしも

てやつして、さるめざましき目を見てあるべしと、何事を思ふべきぞ。また、その後、正しき男になりて出で交るはむを、女なる四の君だに、『ありしそれとも思はぬは』とこそ詠みたるに、けざやかに、さしも向かひ見る見る、あらぬ人ともいと思ひも分かぬほど、むげに言ふかひなし。まづ、この人の身のありさまを思はむにも、かの麗景殿の尚侍の、静まり、つきづきしくひきくみて、かくべくもあらざりし気色を思ひ合はせよかし」と言へば、また、「それもさま異にて。吉野の中の君、婿取られて、さばかりの恨み残りしあたり、と思ひ知られて、ほけありくなどこそいみじく心劣りすれ」など言ふ。

(二四五～二四六頁)⁽¹³⁾

と、色好みであること、女君を宇治に閉じ込めて自分の元から離れていかないと過信していること、入れ替わった後の大将を女君と信じていること、男君の二条邸で生活しているにも関わらず女君に気づかないこと、吉野の中の君と結婚して、それが女君との関係のある所とも気がつかないでいるということを「いと心おくれたれ」と批判されているように、宰相中将は女君を理解しない。しかし女君を理解しないのは宰相中将だけではない。男君も、

さても中納言ものしたまふらん、悪しかるべきことにもあらず。今はじめたるやうにもてなして、なかなか人目やすくこそはべらめ：(巻三・三七五～三七六頁)

と、もとの姿に戻った後は、宰相中将と結ばればよいといった考えを示すなど、宰相中将から離れた女君の心情を理解していないと言える。きょうだいであっても、女君の意思表示なしに「世づかぬ」女君を理解することは困難であることがわかるので、女君を理解していないからといって宰相中将が烏譚者であるとは言えない。

(iii) 「世評」について。本文には以下のようにある。

世には、「大将の吉野山の上の御妹、中納言通ひたまふなり」「大将殿の逢はせたてまつりたまふなり」「右の大臣わたりのことゆゑそばしかりぬべかりし御仲も、いとよく、大将殿の御心ばへのありがたく、人のいかにぞや思ひぬべきところを、ひき違へ、かくものしたまふこと」「これにつけても、大将をぞめでたてまつるべき。中納言さのみやうのもの」と、いと人聞き便なかるべきを、かへすがへす思し返せど、なほもの懲りもしたまはで、ありし月影の琴の御容貌有様なほ身をも離れぬ心地したまへば、さりげなくてさりぬべき隙もやとうかがひたまへど、いとももの遠くもてなしたまひて、つゆの隙あるべくもなきぞ心やましかりける。

(巻四・四九七〜四九八頁)

これは、大将となった男君が妻(四の君)の密通相手である宰相中将を許し、且つ、新しく吉野山の中の君という結婚相手まで斡旋するという寛大な心を賞賛した際に語られた宰相中将への世評である。「中納言さのみやうのもの」という表現だけでは、宰相中将が

烏譚者であるとは言いい切れない。

以上のように(i)～(iii)はいずれも宰相中将を烏譚者とする理由として妥当ではないのである。宰相中将が烏譚者であるとするのは妥当ではないが、彼が『とりかへばや物語』の読者にとって愚かな人物に見えてしまうというのは否めない。先に引用した『無名草子』では、「宮宰相こそ、いと心おくれたれ」「さま異にて」「いみじく心劣りすれ」と述べている。改作本『とりかへばや物語』成立時の読者の感想として、宰相中将が「いと心おくれ」て「いみじく心劣りす」る人物に見えるというのは、彼が烏譚者であると断言する根拠にはならないが、事実としては認められるべきであり、後述する父としての姿よりも強く読者に印象付けられてしまっているのである。

四、父としての宰相中将

宰相中将を烏譚者とするのは妥当ではない。では、『とりかへばや物語』において宰相中将はどのような人物なのか。本節では父親という視点で宰相中将を論じてみたい。

密通相手の四の君との間に女兒を二人儲けてはいるが、表向きは「左大臣家の子息である大将の娘」であり、母方は「時の右大臣の孫」に当たるので、宰相中将が直接娘達と関わっていく描写は見られない。ここでは女君との間に儲けた宇治の若君に対する宰相中将の姿

を検討していくことにする。

子持ちの君も、手づからかき臥せて扱ひたまふさま、いとあはれなり。若君をば目も放たず、疎からぬ人の乳ある迎へ寄せて、乳母にも、世にあらはれてかかる人のあらましかばいかにかひがひしくもてなされまし、よろづ隠れ忍びたるこそと、かひなく口惜しければ、このほどは異事なくこの扱ひに心入れて、あからさまにもたち出でず。

(巻三・三六〇—三六一頁)

右の本文は、宇治の若君が誕生してまもなくの場面であるが、ここに宰相中将の父親としての姿が描かれている。「目も放たず」という表現から、宰相中将が我が子から目を離すことなく養育する姿を読み取ることができる。また、「疎からぬ人の乳ある迎へ寄せて」と、宰相中将が若君のために人脈を駆使して乳母を探し出したことが推察される。

また、宰相中将は若君を常に近侍させ、その成長を見守っている様子が語られていく。

若君のかかることやあらんとも知らず顔に何心なき御笑み顔を見るが、限りと思ひとぢむる世のはだしといとど捨てがたくあはれなるにも、あはれ、かかる人を見捨てたまひけん心強さこそ、思へどあさましく、ことわりはかへすがへすも言ひやる方なく、胸くだけてくやしきいみじく、人の御つらさも限りなく思ひ知らる。

(巻三・三九二—三九三頁)

昔よりよしなきことどもを思ひしはものにもあらざりけり、すきずきしくよろづに色めきて、果てはかくわびしく身をせむるやうにかなしきことを思ひ嘆きて明け暮るるよ、若君の御顔ばかりに命をかけて、いますこし涙流れまさりける。

(巻三・三九四頁)

一つ目の本文は、女君が失踪したとも知らないで宰相中将に微笑みかける若君を見て、若君をこの世の絆と想っている。また二つ目の本文のように、宰相中将の視線は命をかけるほど若君に注がれており、若君を生きたる拠り所としているということが語られており、ここに宰相中将の父としての姿を読み取ることができる。

五、おわりに—子を愛する父として—

宰相中将が烏詩者であるという通説に疑問を持ったことを起点として、宰相中将が烏詩者でないならば、『とりかへばや物語』においてどのような役割を担うのかということ、を、「父親」という視点から考えてみた。結論は鈴木弘道氏が、宰相中将が「子に対する温かい愛情を持った父親としても描かれてゐることは注意すべきであると思ふ。」と述べたことに一致する部分もあるが、本稿で明らかになったのは、宰相中将が「子育てする父」だということだ。

女に捨てられた男が一人で子育てすることは、『とりかへばや物語』が創作され、読まれた当時の子育ての常識の枠には当てはまら

ない。十・十一世紀の平安時代において、子供の養育は母方で行われていたというのが通説である。高橋秀樹氏が、

一〇〇一世紀の父子関係は、母子関係という強い絆を前提に存在し、さらにそれを双方向的な親族関係が取り囲んで、さまざまに補完していたと言えるだろう。¹⁵⁾

と論じているように、「家」成立の萌芽時代の父子関係は母子関係を前提とした上にある。しかし、宇治の若君には母はいない。

さらに中世前期における子供の養育について、秋山喜代子氏は次のように類型化している。

I 父方で養育（父母と同居）。祖父、祖母と同居し、父母とは別居する場合も含める。

II 母方で養育（父と別居の母、外戚と同居）。

III 養子に出す。

IV 養子に出す。¹⁶⁾

I・IVとも基本的に子供は母親と同居することが前提である。

「家」が成立した十二世紀以降は、I型が基本的な養育のあり方でIII・IV型が加わる形を取り、父方で養育されるのは、嫡子、父の愛子、同居する妻の子であったという。では母がいらない子はどのようなのか。『とりかへばや物語』を例に考えて見ると、男君と女春宮との間に生まれた若君は、皇女密通の末の不義の子であるため左大臣家に引き取られ、若君は自身の父方の祖父母に養育され、最終的に

吉野の姉君が育てるまでは、父である男君とは別に暮らすことになる。女春宮腹の若君は秋山氏の分類でいえばI型である。これに対し、宇治の若君も父に引き取られるのでI型である。宰相中将の父である式部卿の宮が養育に関わっているという記述はなく、宰相中将が吉野の中の君と結婚するまで、乳母はいるものの、父が一人で養育したことになる。ここに大きな差がある。男君は子育てしないが、宰相中将は自ら子を育てるのである。

宰相中将は、女君を宇治に囲うことによって彼女は自分の元から離れまいと過信したり、きょうだいの取り替えの秘密を知らず、入れ替わった男君を女君と勘違いしたりするなど、物語の読者が一見して宰相中将を滑稽に思う場面が多く描かれている。しかし、宇治の若君の父としての側面からは色好み・烏滸者といった通説とは違う宰相中将の一面が窺える。

さまざま思ふさまにめでたく御心ゆくなかにも、内の大臣は、年月過ぎかはり世の中の改まるにつけても、思ひ合はする方だになくてやみにし宇治の川波は、袖にからぬ時の間なく、三位中将のおよすけたまふまに、人よりことなる御様、容貌、才のほなどを見たまふにつけては、いかばかりの心にてこれをかく見ず知らず跡を絶ちてやみなんと思ひ離れけんと思ふに、憂くもつらくも恋しくも、一方ならずかなしとや。

（巻四・五二頁）

物語末尾である右の本文は、内大臣となった宰相中将が女君を忘れられないことを語り、我が子を見るにつけて、女君はいいどんな心でこの子に会うことも消息を知ることなく、行方を絶とうと思ひ離れたのだと嘆くものである。宰相中将は、子の父親という視点から我が子と離れた母親としての女君の苦悩に思いを馳せるが、女君と宇治の若君の再会を知っている成立当時の読者には、常識に反して一人で子育てしてきた宰相中将の滑稽さを強く印象付けたと推察される。しかし、現代の読者から見れば、女君が残した子を愛する姿は、ただ「子を愛する父」として映るだろう。宰相中将への評価は、時代の変化と共に捉え直されるべきである。

『とりかへばや物語』には子を見守り、片親ながらも子育てする宰相中将の父としての姿が語られる。それは、取り替えという奇想天外な物語の設定の副次的な産物に過ぎないのだろうか。当時の一般常識の枠を越えて子を育てる宰相中将の父親としての側面は、子を愛する親の美しさが女君とは別の視点で語られているということであり、そこに『とりかへばや物語』が描こうと意図した親の愛を読み取ることができると思うのである。

※本稿において、『とりかへばや物語』の引用は、すべて『新編日本古典文学全集 39 住吉物語 とりかへばや物語』（小学館、二〇〇二年）によった。『とりかへばや物語』は石壁敬子氏校注・

訳。底本は、国文学研究資料館蔵初雁文庫本である。本文の引用は、括弧の中に『とりかへばや物語』における巻数と頁数を記した。本文・論文等の引用に際して旧漢字は現代通行のものに改めた。また、引用する際に私的に傍線を付した。また、使用した各注釈書はそれぞれ以下の通りである。①吉田幸一『とりかへばや 上冊 古典文庫第一六五冊』（古典文庫、昭和三六年四月）（底本…伊達家旧蔵本）、吉田幸一『とりかへばや 下冊 古典文庫第一六七冊』（古典文庫、昭和三六年六月）（底本…伊達家旧蔵本）：『古典文庫』②鈴木弘道『校注 とりかへばや物語』（笠間書院、昭和四八年一月）（底本…伊達家旧蔵本（吉田幸一博士蔵））：『校注』③桑原博史『とりかへばや物語（一）』（講談社学術文庫、昭和五三年十月）、同『とりかへばや物語（二）』（昭和五三年十二月）、同『（三）』（昭和五四年五月）、同『（四）』（昭和五四年十月）（底本…筑波大学図書館蔵写本四冊）：『学術文庫』④田中新一、田中喜美春、森下純昭『新釈とりかへばや』（風間書房、昭和六三年五月）（底本…宮内庁書陵部蔵御所本）：『新釈』⑤大槻修、今井源衛、森下純昭、辛島正雄『新日本古典文学大系 26 堤中納言物語 とりかへばや物語』（岩波書店、一九九二年三月）（底本…陽明文庫本）：『新大系』⑥友久武文、西本寮子『中世王朝物語全集 12 とりかへばや』（笠間書院、一九九八年六月）（底本…東京大学文学部国語研究室蔵本）：『全集』⑦石壁敬子『新編日本古典文学全集 39 住吉物語 とりかへばや物

語』(小学館、二〇〇二年四月)(底本…東京大学文学部国語研究室蔵本)：『新全集』

注

- (1) 宰相中将に関する論考は、安田真一氏の『とりかへばや』宰相中将試論「欲望・恋情・焦り」(『古代文学研究』第二次第九号、二〇〇〇年十月)を皮切りに、二〇〇〇年以降に増えてきている。
- (2) 西本寮子『とりかへばや物語』の主人公「女性としての成長を軸として」(『国文学攷』九八、一九八三年六月)
- (3) 神田龍身「分身、交換の論理——『木幡の時雨』とりかへばや——」(『物語文学、その解体——源氏物語』「宇治十帖」以降——有精堂、一九九二年九月)
- (4) 安田真一『とりかへばや』宰相中将試論「欲望・恋情・焦り」(『古代文学研究』第二次第九号、二〇〇〇年十月)
- (5) 岡本美奈「栄華の物語を支える「烏語者」——とりかへばや物語」の宰相中将」(『表現と創造』5、二〇〇四年三月)
- (6) 中島正二『とりかへばや』の宰相中将に関する若干の考察」(辛島正雄、妹尾好信編『中世王朝物語の新研究——物語の変容を考える』新典社、平成十九年十月)
- (7) 佐野佳矢乃『とりかへばや物語』宰相中将の人物像について「好色者らしからぬ好色者」(『東京女子大学日本文学』一〇九、二〇一三年三月)
- (8) 注(6)に同じ。
- (9) 伊達舞『とりかへばや』の女君・宰相中将と宇治の若君——親子関係の「文」(井上真弓、乾澄子、鈴木泰恵、萩野敦子編『狭衣物語 文の空間』翰林書房、二〇一四年)

(10) 「くにつけても」という表現に関しては、辻本桜介「複合辞ツツケテの接続助詞用法について——現代語と中古語を比較して——」(『日本語学論集』第9号、二〇一三年三月)に詳しい。

(11) 「移り詞」は江戸時代末期の国学者、中島広足の随筆『海人のくづつ』において説明されている。(日本随筆大成編輯部編)『日本随筆大成 新装版(第一期) 10』(吉川弘文館、平成五年)より引用する。(傍線は引用者)

〇うつり詞

源氏物語の文に、いはゆる草子地の詞あり。人々の詞あり。又人々の心のうちをたゞにいふ詞あり。此三の差別、其詞つゞきの界、大かたはいとよくわかれたるを、又おのづからうつりゆきて、地の詞より、人の心のうちをいふ詞になり、或は心のうちをいふ詞より地にうつり、其間に、人の詞まじりなど、なほさま／＼にはたらかしかきたるところあり、これ紫式部が文法のすぐれたる故のみにあらず。すべて物語文は、そのかみ人の物がたらふま、を、記せるさまにもおのしたれば、詞のしらべにまかせて、おのづからしかうつれるものなり。今、俗にも、人のさま／＼と、世のありさまをかたりあふ中には、さやうのおもむきに、おのづからうつり行語あるを、其しらべにまかせて、きく人はたしからず／＼よく聞きとり行がごとし。さを玉小櫛に、詞の界なくて、と、のはぬやうにおもはれて、もじの落たるにやなどいはれたる所もあるは、委しく考へられざりし故なり。

広足は、心内文から地の文へ、会話文から地の文へというように、語りの主体が移行していく過程を「移り詞」として捉えている。

(12) 『狭衣物語』の本文の引用は、流布文系の旧東京教育大学国語国文学研究室蔵『狭衣』春夏秋冬四冊本を底本とした、鈴木一雄校注『新潮日本

古典集成（第六八回目） 狭衣物語 上』（新潮社、昭和六〇年、同『第七四回目』下）（新潮社、昭和六一年）による。深川本を底本とした（巻四は平出本が底本）、小町谷照彦・後藤祥子校注『新編日本古典文学全集 30 狭衣物語②』（小学館、二〇〇一年、巻四・三八〇頁）も「我は亡せたまひぬるも、思へばさまざまにはかなう、あはれる世なりやなど、…」と移り詞になっている。

- (13) 樋口芳麻呂、久保木哲夫『松浦宮物語 無名草子 新編日本古典文学全集40』（小学館、一九九五年五月）

- (14) 鈴木弘道『平安末期物語の研究』（初音書房、昭和三五年三月）

- (15) 高橋秀樹「第1部2 古代・中世の父」（比較家族史学会監修 孝本貢・丸山茂・山内健治編『父―家族概念の再検討に向けて―（シリーズ比較家族第Ⅲ期）1』早稲田大学出版部、二〇〇三年一月）

- (16) 秋山喜代子「養君にみる子どもの養育と後見」（『史学雑誌』二〇二一「一巻」、一九九三年一月）

—おさない・あやの、広島大学大学院人間社会科学研究所博士課程後期退学—